【44】

氏　名（本籍）	冨樫純一（山形県）
学位の種類	博　士（言語学）
学位記番号	博甲第 3304 号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	**日本語談話標識の機能**

主　査	筑波大学教授		林　史典
副　査	筑波大学教授	博士（言語学）	坪井美樹
副　査	筑波大学助教授		大倉　浩
副　査	筑波大学助教授		杉本　武
副　査	筑波大学助教授		矢澤真人

論文の内容の要旨

本論文は，日本語談話において多く用いられる，「へえ」「ふーん」「まあ」「うん」などの，いわゆる感動詞・間投詞・応答詞と呼ばれる表現形式を，発話者の心的情報処理操作を標示し談話の展開に影響を与える「談話標識」として捉え，それらの持つ本質的機能を論じたものである。

本論文の構成は以下のとおりである。

序　章　考察対象／先行研究概観／理論的前提
第一章　「ふーん」「へえ」「ほう」の機能
第二章　「え？」と「は？」の機能的な差異
第三章　「まあ」の本質的な機能について
第四章　非文末「ですね」の情報処理的側面について
第五章　「はい」と「うん」の関係をめぐって
第六章　否定応答表現の諸相
終　章　課題／展望

序章では，本論文の具体的な検討に入るための基本的な枠組みが提示される。まず，従来「感動詞」「間投詞」「応答詞」といった様々なカテゴリーに含められていた表現形式が談話内で果たす役割の共通性が指摘され，本論文で取り扱う具体的な考察対象の設定が示される。次いで，これらの表現形式に対してなされてきた先行研究の成果とその問題点が洗い出され，談話管理理論及びChafeの一連の研究等を踏まえ，考察対象となる表現形式を「談話標識」と捉え，その本質的機能を記述するという本論文の基本的な立場が明らかにされる。

さらに，本論文の考察の方法論的基盤となる著者独自の概念として「心内領域」「語用論的フィードバック」の二つが提示される。「心内領域」はさらに「バッファ（活性情報）」と「データベース（半活性情報）」という2領域に区分され，両者を結び付ける「linking」という概念が設定される。これらの概念を用いて記述することにより，「談話標識」の持つ，話し手の心的操作のモニターとしての本質的機能の面と，聞き手

への態度・感情の表出という派生的な面とを十全に捉えることができると著者は主張する。

第一章では，「ふーん」「へえ」「ほう」の三つの談話標識について，序章で提示された理論的道具立てを用いて検討が加えられ，その機能について次のような結論を導いている。

即ち，「ふーん」「へえ」「ほう」は，いずれも提示された情報（バッファに置かれた情報）を計算処理せずにデータベースに格納したことを示す標識であること。三者の間の違いは，情報に付与される属性の差に求められ，「ふーん」→「へえ」→「ほう」の順に与えられた情報に対する肯定的属性が強くなること。また，これらの談話標識が聞き手に対して，「話題に興味を持っていない」とか「強い関心を示す」とかの様々な効果を与えるのは，上述の本質的機能から語用論的フィードバックによって派生するものであること。

第二章では，「え？」と「は？」の二つの談話標識について同様に検討が加えられ，次のような結論が導かれる。

即ち，「え？」と「は？」は共に提示された情報に対する linking の不在を標示する。両者の機能的な差異は，「え？」が提示された情報とデータベースに呼び出している半活性情報群との linking を計算した結果，そのような linking が不在であることを標示するのに対して，「は？」は計算を行わないまま linking が不在であると結論づける点にある。また，「え？」と「は？」が聞き手に対して「聞き返し」や「驚き・意外」の意を持つのは，linking の不在，つまり，用意されていない情報がバッファに置かれたことが，語用論的な派生として「驚き」等に解釈されるのである。

第三章では，談話標識「まあ」についての分析が行われる。結論として，「まあ」は，バッファに置かれた情報に対する計算処理過程が曖昧であることを示すものと規定される。「まあ」が，実際の談話では，発話者の態度や意見が不確定であるという印象を聞き手に伝えたり，発話者の主張の聞き手に対する聞こえの強さを和らげたり，時として発話者の驚きの感情を伝えたりするという，多様な伝達上の働きも，この「まあ」の情報処理過程の曖昧性という本質的機能の語用論的フィードバックの結果派生する効果であると主張する。

第四章では，非文末（＝文の途中）に現れる「ですね」が談話標識としてどのような機能を果たしているかという問題が取り扱われる。著者は，非文末「ですね」が現れる事例について，綿密なコーパス調査の結果，その分布傾向を明らかにした上で，非文末「ですね」の機能は，情報が未だ検索処理中で情報処理の全過程が終了していないことを標示することにあると結論づける。そのような機能を表示する結果，談話の進行において自分の turn（発話順番）が非円滑に展開していることを聞き手に伝えるという語用論的効果を生じるのであるとする。

第五章では，「はい」と「うん」という二つの談話標識の関係が議論される。従来の研究では，丁寧さの異なりが「はい」と「うん」との使い分けの要因とされてきたが，本論文では，他の談話標識と同様，「はい」と「うん」との間の心的操作の違いは何かという観点から検討が加えられる。その結果，両者の違いはデータベースにどれだけ情報が呼び出されたかという量的な差異であり，連関する半活性情報が多数呼び出された「はい」に対して，「うん」は半活性情報が少数しか呼び出されなかったものであると結論づける。そのことにより，語用論的効果として，「はい」の方が「うん」よりも相手の与える情報に対してより多くの連関する情報を処理していることとなり，「はい」の方が対応としてより丁寧な印象を誘導するのであるとする。

第六章では，「いえ」「いいえ」「いや」「ううん」という否定応答に用いられる談話標識を分析し，機能の記述が行われる。まず，用例の精密な観察の結果，否定とは，情報間の整合性（linking の整合性）が無いことを示す心的な操作と捉えられることを明らかにする。次いで，否定の矛先を，情報そのものに向けるか，情報の提示行為に向けるかでの違いが，これらの諸形式間の機能的な差異となって現れることを論ずる。また，語用論的な効果として，否定の方向性を自分の行為に向けることで，相手との心理的軋轢を回避するといった和らげの効果を表出できることなどが指摘される。

終章では，各章で論じられた事項がまとめられ，一貫した理論的前提と方法で議論が行われたことを確認し，日本語談話標識の本質的機能として本論文中に記述できた成果を要約して示す。その上で残された課題と今後の展望が示される。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文が研究対象としている言語形式，即ち，感動詞・間投詞・応答詞などと呼ばれる類は，実際の発話においては非常に多様な形式が頻繁に使われているにも関わらず，伝統的な文法研究の世界では注目されることの少なかったものである。近年の言語研究において，会話分析の領域で，これらの言語形式が果たす会話の上での働きが注目され，また，情報管理理論の会話分析への適用などの中でもこれらの言語形式を取り上げるようになった。本論文も主要な先行研究として取り上げている W.L.Chafe の研究や田窪・金水の談話管理理論などが，現在のところこの領域の研究の一つの到達点と言える。しかし，まだまだこの領域の研究の蓄積は十分でない。このような状況の中で，本論文のように多くの談話標識について，一貫した視点から具体的・体系的に考察を加えた研究成果が示されたこと自体，極めて意義の深いことであり，本論文の学的意義の第一として評価に価することと言えよう。

本論文が示した独創性のうち最大のものは，本論文が扱う談話標識の本質的機能を，話し手が情報に関して行う心的操作の標示にあるとし，従来の会話分析の研究が談話標識の主要な機能としていた，聞き手への様々な意志や感情伝達の側面を，飽くまで語用論的な効果として派生するものであるとして，この立場で一貫した記述を試みている点である。この立場を貫くことによって本論文は，多様な談話標識の機能を共通の記述法で描き出すことに成功している。

さらに，独創的な点として，本論文は，話し手の心的操作のあり方を分析するために，仮想的な心内領域をバッファ（活性化された情報が置かれる領域）とデータベース（半活性化された情報が置かれる領域）という二つの性質の異なる領域に分けることを提案し，それらの領域間で行われる情報処理の過程として談話標識の機能を記述する。このことによって多くの談話標識の機能の差異の説明に成功していると言うことができる。

以上のように本論文は独創的でかつ一貫性のある考え方に貫かれた優れた研究である。今後の課題としては，なお，本論文で具体的に取り上げられなかった談話標識についても本論文のような分析が可能かどうか検証を続けることである。また，これら談話標識は，実際の発話においては，様々な音調上の変容が加えられて発話されることにより，細かなニュアンスの違いを表すのが常である。このような現象をどう考えるかも今後の課題として残るであろう。本論文の考え方は，或る面，人間の言語情報処理の過程をコンピュータの情報処理に準えたものと言える。本論文の考え方が単なる「比喩」ではなく，本当に人間の言語情報処理のあり方を述べているのかどうか，この点はなお本論文の根本的な問題点として残らざるを得ない。しかし，この問題の最終的な解答は，本論文の筆者の今後の研究に期待すべきものであり，日本語談話標識の機能の記述として本論文の挙げた成果は学位論文として十分な水準に達しているものと判断される。

よって，著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。